

上野通明がジュネーヴで優勝

ジュネーヴ国際音楽コンクールの子部門で10月28日、上野通明(25)が日本人初の優勝を挙げた。上野は2万スイス・フランの賞金のほか、「若い聴衆賞」、「JUSSYでのコンサート」賞も獲得した。スイスでの反応はまだ鈍いが、10月18日にチューリッヒ州在住のエディタ・グルベローヴァが急逝したことも関係しているかもしれない。グルベローヴァについては、詳しくは118ページからの追悼記事に記すが、上野については今後の報道に期待したい。

新音楽総監督ノセダが 新プロダクション・デビュー

今夏からチューリッヒ歌劇場の音楽総監督に就任したジャンナンドレア・ノセダが、初めての新演出プレミエ、ヴェルディ《トロヴァトーレ》を10月24日に指揮した。歌手陣はヴェテランぞろいなので、注目的は指揮者の音楽作りだ。総じてエッジの効いた演奏で、息つく暇もないテンションを保ち、ノセダの激しい息遣いも聴かれる情熱的な演奏だった。

考えてみれば、頭のよい選曲だ。昨シーズンにはオーケストラと共に練習場からのリモート出演だった合唱団は、舞台上で演じることに飢えており、持ちうるパワーを炸裂させたからだ。出だしの合唱ではノセダが御しきれないほど疾走していた。そして最近当歌劇場では観られなかったヴェルディ四熟期のこのオペラは音楽的に華がある。そこにヴェテラン歌手がそろったら、観客を満足させるお膳立ては整ったも同然だ。しかしそのうち、なにかが欠乏している気がしてきた。オーケストラは鏡いがまろ

やかに溶け合わない。歌手が心底「歌わされてはいない」。全体的に「イタリア的な長所も短所も排除した成功狙い」という感じだ。現在天下無敵のテノール、ピョートル・ベチャワがめずらしく歌い心地が悪そうだったのもそのせいだ。とくにアリア《ああ、美しい人》は歌い出しから急いで幕穴を掘り、最高音は短く納めてギリギリ破綻を回避した。続く《見よ、恐ろしい炎を》の最高音はしっかり保てたので救われたが、「自分が歌っているときは聴衆に心配させたくない」というポリシーのベチャワにハラハラさせられたのは初めてだった。



チューリッヒ歌劇場の《トロヴァトーレ》から。ノセダが音楽監督として初めての公演だった
©Monika Rittershaus

レオノーラのマリーナ・レベカは「現在最高のレオノーラ歌い」という刻印を残した。ただ、ローマで学び、イタリア語も堪能ながら、母音などイタリア的でない部分もある。最初のアリア《穏やかな夜》では軽く声を当てるところで完璧にはまらなかつたが、後半のアリア《恋はばら色の翼に乗って》は上手くまとめ、クイン・ケルシー扮するルーナ伯爵との二重唱は完璧にこなし、今宵の主役となった。ケルシーはいつもながらかすれ声で歌い始めるが、甘い歌い回りで満足感を与えた。アズチエーナ役のアグニエシユカ・レリス、イネス役のボゼーナ・ブイニツカとベチャワの3人のポランド勢が実力を見せつけた。威嚇した歌いかたをしなくともドラマティックで、どの音も最良の共鳴点に声が当たっているレリスのアズチエーナは貴重な存在だ。

アデレ・トーマスの演出は凝っているが安っぽい。ルーナ伯爵の衣裳もお笑いの域だ。それでも遠慮がちにブーが聴こえただけで済んだのは、会場中が完全な生演奏にありがたみを感じているからだだろう。これからのノセダを注視したい。

ヨンチエヴァの《トスカ》

さかのほって10月12日にはソニー・ヨンチエヴァがタイトルロールを歌ったブツチーニ《トスカ》を聴いた。パオロ・カリニャーニの指揮は出だしからゆっくりすぎて、緊張感がない。ジョゼフ・カレヤの明るいイタリア的な発声は聴き心地がよいが、高音は声帯が合わず、それを上手く庇いながらの好演と言える。スカルピアのトーマス・ヨハネス・マイヤーは、シーズンオーブニングのR・シュトラウス《サロメ》でいままでにな

重要な役回りを課されたヨカナン役が光っていたのに、イタリア語の明るい母音が使えないため、老けた印象。スカルピアの好色男に成り下がった。ヨンチエヴァは性格的にトスカにピッタリだが、敬虔なカトリック信者で「途な性格描写に欠けていた。声も押し気味で、音程も高めに取って無難に取めているが、それでも彼女のような肉感的なイタリアの声に飢えているのだろう。終演後は十分に満足感が得られた。

念願の《戦争レクイエム》

トーンハレでは10月7、8日、コロナ禍で延期されていたブリテン《戦争レクイエム》がようやく聴かれた。指揮のケント・ナガノはアンドレアス・ヤンケをコンサートマスターに置くチューリッヒ・トーンハレ管弦楽団と完全に一体となって、すべてを掌握していた。チューリッヒ・ジンクアアカデミーも好演し、「ギリエ」の美しい弱音や「デイエス・イレ」の冒頭の男声と打楽器トランペットで盛り、最後は救いのような響きでアーメンと結んだ。バリトンのラツセル・ブラウンは瑞々しく伸びのある声で、クルト・ヴァイルのような戯曲的な二重唱をテノールのイアン・ボストリッジと聴かせた。「サンクトゥス」では舞台上から輝かしいオーケストラが、バルコニー席からはジョージア・ジャーマンのソプラノが響いた。「リベラ・メ」で再び救いを求めるも、最後は救いから遠い現実を描写した。そのほか、ルツェルンではコロナ禍で半年延期され、モスクワに「初」のタイトルを奪われたテオドル・クルレンツィス&ムジカエテルナのレジデンシー公演が行われた。詳細は次号でレポートする。